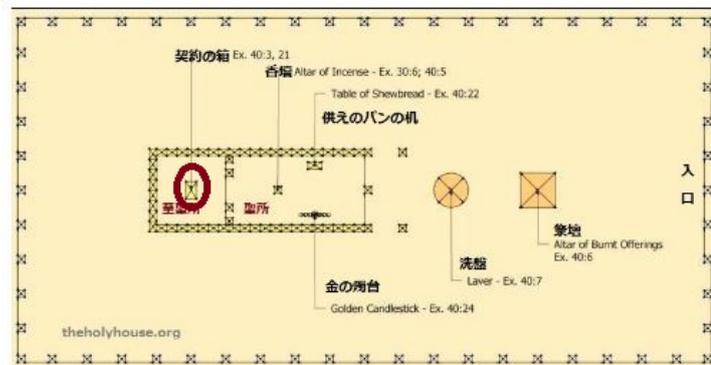


## 「契約の箱」に象徴されるイエシュア

北側



南側

### ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい(ミシュカーン)」の最後(第十三回目)の学びとなりました。幕屋における最初の啓示は「契約の箱」です。しかし私たちが神に近づく上では最後の到達点です。契約の箱の上に置かれた贖いのふたの中心(二つのケルビムが目を留めているところ)から神はモーセに語られました。そのフレーズは「主はモーセを呼び寄せ、告げて仰せられた」です。「モーセ」個人に対して語る場合には、「主は仰せられた」で済みますが、モーセを通してイスラエルの民に語る場合には、「告げて仰せられた」となります。そこにはまとまった重要なメッセージが告げられるのです。「告げて」と訳された「ダーヴァル」(דַּבַּר)の名詞形は「ダーヴァール」(דַּבָּר)で、「終わりの時」には神の「ことば」である「御子」によって語られました。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 1章 1~2節

- 1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、
- 2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。

●モーセや預言者たちが神から「告げて仰せられた」ことのすべてが、御子についてのことであり、それがいわば預言的に語られていたのです。御子は、この世に來られて語られたこと、またなされたことによって、初めてその真の意味を明かされたと言えます。

●ところで、出エジプト記 25章 16節、21節では、契約の箱の中に入れるもののことを、「わたしが与えるさとし」と表現しています。「さとし」と訳された原語は冠詞付の「ハー・エードウツ」(הָאֵדוּת)で、これは石の板に記されている**十戒**を指しています(ただし、十戒ということばは聖書にはありません)。出エジプト記では「箱の中には、わたしが与えるさとしを納めなければならない。」とだけ示されていますが、ヘブル人への手紙を見ると、以下のように三つのものが入っていることが分かります。

# משכן

【新改訳改訂第3版】ヘブル書9章3～4節

9:3 また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋が設けられ、

9:4 そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナの入った金のつぼ、芽を出したアロンの杖、契約の二つの板がありました。

- 今回は契約の箱とその中に置かれている三つのもの(①契約の二つの板、②マナの入った金のつぼ、③芽を出したアロンの杖)と、それらが象徴している事柄に注目してみたいと思います。



二枚の契約の石板(あかしの板)



マナを入れた金のつぼ



芽を出したアロンの杖

●幕屋建造の指示を受けるために、40日40夜、シナイ山に登っていたモーセは、幕屋の至聖所にある「契約の箱」の中に納めるようにと授けられた「あかしの板二枚」、すなわち、神の指で直接に書かれた石の板を授かりました。ところが、シナイの山で神からの指示を受けている間、モーセが山から降りてくるのを今か今かと待っていた人々はしびれを切らし、「私たちをエジプトの地から連れ上ったモーセという者がどうなったのか、私たちにはわからないので、私たちに先立っていく神を造ってください」とアロンに詰め寄ったのでした。これは、強力なリーダーが長い間いないという状態が続いたために、民全体の求心力が喪失してしまった状態にあったと言えます。そのような状態に置かれるとき、民たちはどうなるのか。ある意味で「試された」と言えます。「40日40夜」という表現は聖書の中においては、「試みの期間、ふるいにかけられるテスト期間」を意味します。このときアロンは、民たちのただならぬ空気を感じたのかも知れません。アロンは民の中から金の耳輪をはずして持ってくるようにと言い、それらで「金の子牛」の像を造ったのでした。そして、「翌日、朝早く、彼らは、いけにえを携えてきて、飲み食いし、立っては、**戯れた。**」のです。



●「戯れた」と訳された「ツァーハク」(צָחַק)は「笑う」という意味ですが、ピエル態では「からかう、冗談を言う、戯れる、愛撫する、いたづらをする」という意味になります。おそらくこのイメージから、無礼講がまかり通る「飲めや歌え」の大宴会、破廉恥な乱交パーティーだったと考えられます。「あなたの民は、墮落してしまった」という主のことばを聞いたモーセが山を降りて、自分の目でその姿を見た時、彼は怒り、神から与えられた契約の石を投げ捨て、砕いてしまいました(出 32:19)。さらには民に呼びかけ、「だれでも、主につく者は、私のところに」と言うと、レビ族が彼のもとに集まり、彼らがモーセのことばに従ってイスラエルの民のうち三千人を粛清しました。



- 再び山にモーセは登り、自分で二枚の石に、十のことばを書き記しました(出 34:28)。ですから、契約の

箱の中に納められた石の板は、モーセが自分の手で書き記したもののなのです。

● 附随的な事柄ですが、モーセが幕屋における契約の箱を造るようになげられてから 40 年後、訣別説教の中でレビ人に対して次のことを述べました。

【新改訳改訂第 3 版】申命記 31 章 9～13 節

- 9 モーセはこのみおしえを書きしるし、【主】の契約の箱を運ぶレビ族の祭司たちと、イスラエルのすべての長老たちとに、これを授けた。
- 10 そして、モーセは彼らに命じて言った。「七年の終わりごとに、すなわち免除の年の定めの時、仮庵の祭りに、
- 11 イスラエルのすべての人々が、主の選ぶ場所で、あなたの神、【主】の御顔を拝するために来るとき、あなたは、イスラエルのすべての人々の前で、このみおしえを読んで聞かせなければならない。
- 12 民を、男も、女も、子どもも、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も、集めなさい。彼らがこれを聞いて学び、あなたがたの神、【主】を恐れ、このみおしえのすべてのことばを守り行うためである。
- 13 これを知らない彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたが、ヨルダンを渡って、所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、【主】を恐れることを学ばなければならない。」

● 申命記はモーセのイスラエルの民に対する訣別説教です。その説教の終わりの部分で、「これを授けた」の「これ」とは一体何でしょうか。それは「モーセ五書」(つまり、羊の皮に書き記された「トーラー」)だと思われます。それを主の契約の箱のそばに置くようにと指示しています。



【新改訳改訂第 3 版】申命記 31 章 24～26 節

- 24 モーセが、このみおしえのことばを書物に書き終えたとき、
- 25 モーセは、【主】の契約の箱を運ぶレビ人に命じて言った。
- 26 「このみおしえの書を取り、あなたがたの神、【主】の契約の箱のそばに置きなさい。その所で、あなたに対するあかしとしなさい。

● さらに重要なことは、神のみことばを聞くためにイスラエルのすべての人々(老人から子どもに至るまで)が公に集まることに、神が重きを置いておられるということです。神のみことばを聞くだけでなく、それを学び、理解させて守り行うためです。特に、子どもも主のことばを聞くために主の前に集められるべきです。聖書を読むために互いに集まるということを怠っているとすれば問題です。神のみことばだけでひきつけるものが十分ではないように思ったり、人々を集めるためにみことば以外の何ものかを加える必要があるように思ったりしているならば、神の民が「みことばは蜜のように甘い」という経験をすることは決してできないのです。「老人から子どもに至るまで」という神の指示を重く受け止めなければなりません。

● ちなみに(附随的なことですが)、「契約の箱」について、Ⅱマカバイ書(2:1～18)に以下の内容が記されています。すなわち、ユダの民がバビロン捕囚される時代に、預言者エレミヤは自分への託宣に従ってエリコの向かい、ヨルダン川東岸にあるネボ山へ幕屋と契約の箱、香壇を携えて登りました。この山はずっと昔、モーセが死の直前に登り、「乳と蜜の流れる地」であるカナンを望み見た場所です(申 34:1)。エレミヤはこ

ここに人が住めそうな洞窟を見つけ、そこへ携えてきた物を隠し、入り口を塞ぎました。このとき、エレミヤに従っていた人々があとになって、この場所がわかるよう道標を作ろうと思い立ち行動しましたが、果たすことはできませんでした。エレミヤは彼ら呼び出して叱責して言いました。「神が民の集会を召集し、憐れみを下されるときまで、その場所は知られずにいるだろう。そのときになれば、主はそこに運び入れたものを再び示してくださり、主の栄光が雲と共に現れるだろう。」と（旧約続編Ⅱ マカバイ 2:7～8）。

## 1. 契約の二つの石の板が象徴する「リビング・トーラー」としてのイエシュア

●ところで、二つの石に書き記された「十戒」は、神の「トーラー」(תּוֹרָה)を代表し、また象徴するものです。「トーラー」は神の教え、指針、原理を意味しますが、これがギリシア語に訳されると「ノモス」(νόμος)となり、しばしば「律法」あるいは、「原理」と訳されてしまいます。それがまた「律法主義」と誤解されてしまいます。真の神のトーラー(おしえ)は狭義的にモーセ五書のことを指していますが、広義においては「聖書全体」をも含む概念なのです。そしてその中心に神の御子イエシュアが啓示されているのです。もし、イエシュアなき「トーラー」となってしまう時、それは「律法主義」となってしまうのです。イエシュア自身がどのようにトーラーを理解していたかをいくつか見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】 マタイの福音書 5章 17～18節

17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。

18 まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせぬ限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

【新改訳改訂第3版】 ヨハネの福音書 5章 46節

46 もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。

【新改訳改訂第3版】 ルカの福音書 24章 27節

27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

●さらに、ルカは使徒パウロのローマでの働きを以下のように紹介しています。

【新改訳改訂第3版】 使徒の働き 28章 23節

そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。

# משכן

●ヨハネの黙示録 1 章 8 節に「わたしはアルファーであり、オメガである。」とあります。これをヘブル語で表現すると「アニー・アーレフ・ヴェターヴ」(אָנִי הֵאָלֶף וְהֵאָמֵגָה)となります。ヘブル語の 22 文字の一つひとつがイエシュアを指し示すということの意味しているのです。

●契約の箱の中に納められた二つの石の板は、まさにリビング・トーラーとしてのイエシュアを指し示しています。旧約聖書のどこを切ったとしても、金太郎飴のようにイエシュアのことを語られているということです。そのことを論証し、説得しようとしたのが使徒パウロです。新約聖書、特にパウロの手紙はその宝庫と言えます。とすれば、私たちもヘブル語というツールを用いて、パウロと同じように旧約聖書の中にイエシュアのことを書かれていることを論証することができ、この方こそ神が私たちに与えて下さった最高のプレゼントであることをより明確に確信をもって理解できるようになるのだと信じます。天の父はご自身の御子イエシュアを通してすべてのことをなされることを良しとされたのです。それゆえ、イエシュアが当時の律法学者やパリサイ人に対して語られた以下のことをばをないがしろにはなりません。

【新改訳改訂第 3 版】ヨハネの福音書 5 章 39～40 節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。**その聖書が、わたしについて証言しているのです。**

40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

●ここで語られているイエシュアの警告は、的を外れたみことばの解釈によっては、いのちを得ることはできないということです。神のおしえであるトーラーには、「生けるキリスト」、すなわち「リビング・トーラー」としてのイエシュアがあかしされていることをますます論証して明らかにし、神が私たちに教えようとしている真理を悟るようにならなければなりません。時代的精神を満足させるような教えではなく、あくまでも、永遠に変わる事のない神のトーラー(おしえ)に霊の目が開かれる必要があることを、キリスト教会は今日的課題として与えられているのです。つまり、ますますイエシュアの御名が立ち上がるような聖書の読み方を目指さなければならないのです。

## 2. マナを入れた金のつぼが象徴する「天から下って来た生けるパン」としてのイエシュア

●次に、契約の箱の中に納められた「マナを入れた金のつぼ」とそれが意味することを考えてみましょう。エジプトを脱出したイスラエルは荒野に導かれました。そこは何もないところでした。生存を保障するような食糧がない場所です。ところが、神は 40 年間、毎朝「天から降ったパン」、すなわち、「マナ」という不思議な食料で彼らを養われました。それはまさに彼らの日毎の糧(食糧)となりました。

●この「マナ」はイスラエルの民が約束の地に入るその時まで、毎日、荒野で与えられた食物です。時折(ある季節には)、夕方になると、うずらが飛んで来て、その肉を食べることができたようです。「マナ」に対する神の「おしえ」は次のようでした。

①「各自、自分の食べる分だけ、必要に応じて集めること」

- ②「翌朝まで取っておくことができないこと」
- ③「安息日の日にマナは降らないこと、それゆえ、六日目には二倍の分を取って良い。しかも、それは翌朝になっても食べることができること」

●とても不思議なことは、神のマナは毎日与えられること、しかも一人ひとりに必要な分が与えられること。しかも蓄えることができないことです。そのことから次の教えが成り立ちます。

- (1) 明日のことを思い煩わないこと(マタイ 6 章 34 節)
- (2) 与えられたもので満足すること(テモテ第一、6:6)

●これらは、別の言葉で表現するならば、信仰的自己管理能力ということができます。この能力を培う必要があります。神は私たちに必要を与えてくださるからです。その能力を培うことによって主の平安が心を支配するようになり、**神への集中が可能**となります。使徒パウロは「満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です」と愛弟子のテモテを諭しています。必要以上に求めることは強欲であり罪です。それゆえ、「金銭を愛することが、あらゆる悪の根」であり、それを求めたがゆえに、「信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」(テモテ第一 6:6, 10)と記しています。

●後にイエシュアが、五千人の給食の奇蹟をなされた後に「天からのパン」の話がされましたが、旧約での「マナ」は「天から下って来た生けるパン」であるイエシュアの「型」であったのです。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6 章 48～51 節

48 わたしはいのちのパンです。

49 あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。

50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。

51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。

またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。

●ところが、イエシュアの話聞いた多くの弟子たちが、「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか」と言って、イエシュアにつまずき、イエシュアのもとから離れ去って行きました(ヨハネ 6:61, 66)。「ひどいことばだ」と訳されたギリシア語の形容詞「スクレーロス」(σκληρός)は「気持ち悪い」という意味です。おそらく、イエシュアが「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は・・・」(6:54, 56)という表現を何度もしたからだと思います。しかし、契約の箱の中に納められている「マナを入れた金のつぼ」は、「死ぬことのない**永遠のいのち**」を象徴しているのです。

### 3. 芽を出したアロンの杖が象徴する「憐れみ深い大祭司」としてのイエシュア

●最後に、「芽を出したアロンの杖」について見てみましょう。民数記 17 章を見ると、アロンが持っていた杖とはアーモンドの木であったことが分かります。ここは、イスラエルの民の中に起こった祭司職に関する

論争において明確にされた出来事が記されている箇所ですが、各部族の中でアロンの杖だけが、芽をふき、花をつけ、実がなるという奇蹟が起こりました。この奇蹟によってアロンこそ神が選んだ大祭司であり、格別な祝福を与えられていたことが立証されました。アロンの杖が契約の箱の中に保存されたのは、アロンが神によって選ばれた大祭司であるということです。大祭司の務めは人間に対してはあわれみ深く、神に対してはどこまでも忠実であるということです。それでこそ、はじめて神と人の仲介の務めをすることができるのです。

●新約聖書のヘブル人への手紙には、イエシュアがあわれみ深い永遠の大祭司であることを強調しています。ヘブル人への手紙は全部で13章ありますが、1章と11章を除くすべての章に登場する名詞があります。それはヘブル人への手紙を特徴づけるキーワードです。それは「**大祭司**」という言葉です。この大祭司がどういふ大祭司であるのかが重要です。イエシュアはあわれみ深い大祭司であると同時に、アロンを越えた偉大な大祭司であり、レビ族とは系列を異にするメルキゼデクにつながる大祭司です。大祭司なるイエシュアを仰ぎ見ること、その方から目を離さないでいることがこの書のメッセージとなっています。

●イエシュアが私たちにとってあわれみ深い大祭司となるために、イエシュアはあらゆる点で、兄弟である私たちと同じになることがどうしても必要だったのです。つまり、イエシュアがあわれみ深い大祭司になることと、イエシュアがすべての点で私たちと同じになることは同義であり、密接な関係をもっているということです。イエシュアが「私たちと同じになる」という意味は、ただ単に、私たちと同じ人間としての体(肉体)を持つということだけではありません。そこにはもっと深い意味が隠されているように思います。例えば、イエシュアの受洗と私たちの受洗の意味とは異なります。イエシュアの場合は罪人である私たちと一体となることの本格的なスタートを意味します。しかし私たちの洗礼の場合はイエシュアと一体(ひとつ)となることの本格的なスタートを意味するのです。どちらも一回的な出来事を意味します。イエシュアが私たちと一体となること、ひとつになることについてもう少し詳しく取り上げてみたいと思います。

●「あわれみ深い」と訳されたギリシア語は「エレエーモン」(ἐλεήμων)、ヘブル語では「ラーハム」(רחם)の形容詞「ラハマーン」(רחמן)です。あるいは分詞の「メラヘーム」(מרחם)。英語ではコンパッション(Compassion)と訳されます。このことばが意味することは「**ともに苦しむこと、ともに耐えること**」です。あわれみは傷ついているところへ赴かせ、痛みを負っている人々のところに赴かせ、失意や恐れ、混乱や苦しみを分かち合うようにさせます。また、悲慘の中にある人とともに叫びをあげ、孤独な人とともに悲しみ、涙にくれる人とともに泣くように私たちを促します。それはまた弱い人とともに弱くなり、傷ついた人とともに傷つき、無力な人とともに無力になることを要求するのです。そのように、あわれみは人間の状態のなかにどっぷりと浸ることを意味します。これが、「主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。」「あらゆる点で、兄弟である私たちと同じになることが、どうしても必要だったのです。」(リビングバイブル訳)ということばが意味するところなのです。ですから、あわれみをこのように考えると、単なる「親切」とか、「優しさ」だけでは説明しきれないものがあることがはっきりとします。あわれみは私たちの自然な心の反応として生まれるものとは言えません。むしろ、逆に避けたいものではないかと思えます。なぜなら、私たちは本能的に苦痛を忌避する(嫌って避ける)者だからです。ましてや、他人のために、他人とともに苦しむことなど望まないからです。

●神は全能の神なので、その力で、私たちの問題を簡単に解決することができたはずですが。なにも私たちと同じようになって共に苦しむ必要はなかったはずですが。ところが聖書に「主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。」とあります。「あらゆる点で、兄弟である私たちと同じになることがどうしても必要だったのです。」と言います。なぜでしょうか!! その理由は、神のあわれみの神秘(奥義)が示されるためです。あわれみ深い神が私たちとともにおられるということの真意を経験させるためです。その意味するところは、なによりも「神(イエシュア)が私たちと一体になることを選ばれた」ということを意味します。

●繰り返しますが、「あわれみ」とは「ともに苦しむこと、ともに耐えること」を意味します。そんな神のあわれみにあずかるとき、私たちは全く新しい生き方に開かれます。それは、人間同士の比較や敵意、競争心から解放されて、互いに連帯して生き始めることができるようになるのです。つまり、相手の弱さや足りなさを恥とせず、ありのまま受け入れ、共に生きることに、神のあわれみの深さを経験していく生き方です。キリストにおいて啓示された神のあわれみは苦難で終わるものではなく、必ずや、栄光のうちに終わるのです。その意味では、アロンの杖が契約の箱の中に保存されたことは、枯れたと思われた木が芽を出し、花をつけ、実をならせたことが指し示すように、イエシュアとつながりを持つすべての者があわれみの実を結ぶことができる保障とも言えるのです。

●「あわれみ」は、仕える者としてのあり方の究極的な神のあかしです。もし私たちがキリストのように仕える者の道を選ぶとき、私たちが与える以上に、私たちが仕えている者、かかわっている方から、多くのものを受けていることに気づかされます。それは連帯の愛の絆の喜び、共感できる喜び、大切なものに気づかせられる驚き、それはとりもなおさず、**神のあわれみの神秘**なのです。仕えることを通して、本来ならば、敬遠したかったことの中にある神のあわれみのすばらしさに気づかされるのです。「あわれみ深い大祭司であるイエシュア」を仰ぎ見させていただきながら、主に仕える道を、あわれみの道を、愛のかかわりの世界の深みへと共に歩んでいきたいと思えます。

## ベアハリート

●契約の箱の中に納められた「さとしの石の板」(十戒)は、神のおしえとしての「トーラー」、つまり、**リビング・トーラーとしてのイエシュア**を、「マナの入った金のつぼ」は**天から下って来た生けるパンであるイエシュア**を、そして「芽を出したアロンの杖」は、**あわれみ深い永遠の大祭司イエシュア**を象徴するものです。イスラエルの歴史においてわずか40年にも満たないダビデの幕屋では、これら三つが象徴する「契約の箱」の前で、主の臨在にあふれる礼拝がささげられました。動物のいけにえではなく、むしろ、**義のいけにえ、賛美のいけにえ、従順のいけにえ、感謝のいけにえ、喜びのいけにえ**を楽器と歌をもって主にささげました。それは天における礼拝の「型」です。私たちもそのような礼拝を日々目指していきたいと思えます。